

事例報告 H27-3

団体名： 大山横手道上ブナを育成する会

プログラム名： 水と森の分校

(1) プログラムの目標	地域環境のすばらしさに恵まれていながら、そのありがたさを分かっていない子供たちに、地元にある19.4万トン/日も湧き出ている水を通して、自然との関わりなどを学習して、すばらしい所に生まれたんだと誇りを持たせて、森を含めた自然は自分の宝なんだと気づかせたい。		
(2) プログラムの概要	校外学習は4回行うが、事前に学校で簡単な学習を済ませて心弾ませて出てきている。子供たちは年度ごとに変わるが10～18人ぐらいである。対応する私達指導員は5～6人と子供の数にしては沢山配置している。(2～3人は指導員教育もかねての出席である) 指導員の役割で最も注意させていることは必要以上に説明をしないこと。子供たちが求めている所までしゃべり過ぎないことである。先ず、体で感じさせながら子供たちの言葉を誘導することである。(知っていることを全て教えようとする悪い傾向がある。)		
(3) プログラムの展開			
時間数	プログラムタイトル		
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等(教材等)	
3.5	水の学習 湧水の源泉を探る 水の利用 浄水場の見学	子供たちの自主性を尊重しながら指導誘導する。 間違ったり、分からなかった時だけ助言する。 全て五感を通して体感させる。	
	森の学習 森の働きと役割 本物の森と人工林の比較 自然との対話能力にスイッチオン	学校の事前学習が特に必要。 人工林を歩かせ その後でブナの原生林すなわち本物の林に入りその違いを体感させる。 ブナの林で横になり、リラックスをさせてから森との対話、自分との対話を試みる。人数によっては班分けを変える	
3.5	木を植える学習 苗抜きと根の養生 木を植える 適地適木	通常の植林と違うことをしっかり説明。 苗木1.5～2m 植栽地は国立公園内の急勾配、石がごろごろ、積雪2m 過酷な所に、異常と思える苗木の植林、苗抜きと根の養生も全て自分たちでやらせる。苗木の運搬、道具の運搬も自分たちでやらせる。勿論穴掘りも	
	冬の森の学習 冬芽の観察 冬の動物たちの動き 冬のブナの林の観察	事前に冬芽と動物の足跡、糞の学習 スノーシューの装着技術を事前に出張教育併せて冬山の事前教育。	
0.5	まとめ 発表会 バスでの帰り時間を利用。時には子供たちと給食を食べながら。子供たちの感想と質問を受ける。	対話を通して評価している。 また、子供たちからの感想文を読み終えてから指導者で反省会を行い、今後の指導方法に反映させている。	

(4) プログラムでの連携内容 (①学校、②地域)

①事前に先生にコースを下見してもらうのが基本。前年のプログラムの内容と同じ時には 前年度の先輩たちの活動をビデオで学習してきてもらう。子供たちは興味を持ってやる気満々で参加してくる。

(5) 活動の分析 (学習指導要領との関連または森林環境教育の視点) 上位3項目

1 感性的	僅か400mの間で湧き出る水が19.4万トン/日、しかも年間を通じて11度の水の中に入り山の下から湧き出る水を5感で感じさせる。この水はどこから流れて来るかを話し合う。また、ブナの原生林では木の感触や木の様々なコケ模様に触れ、森の不思議さを探る。さらに、スポンジのようにふわふわの腐葉土に触らせこの役割を 探る。 この腐葉土の上に子供たちを仰向けに寝かせながら、20分間の自然との対話と自分との対話を試みる。
2 自然的	分厚い腐葉土の中に様々な形をした虫がうようよしている。目に見えない微生物も沢山いることも学習する。最初は気持ち悪がるが、むしろ彼らの方が迷惑がっていることを認識した頃から、気持ちが落ち着く。その後で腐葉土の上に寝そべっても 虫が体を這い回っても子供たちは騒がなくなる。子供たちを同じ森の仲間だと認めてくれたんだと教えてやる。 ここで、彼らの働きで1センチの腐葉土が出来るのには100年掛かることも学習する。
3 多面的	水と森の関係を知ることによって、森林の大切さを学び、自分たちの身近な自然の中、どんな動物や植物があって、森林が守られている環境について考え、どう関わっていくかを考える。

教科	項目	学習内容
4年 社会	地元を知る 「飲料水の確保、地元の主な産業の様子、特色のある地域の生活」	自分達の住んでいる地域について関心を持ち、それらを意欲的に調べることを通じて地域社会に対する誇りと愛情を育てる。 自然豊かな所で生活していながら、それに気付いていない所からのスタートである。私達が教えたことを家に帰って、家族に話をするを約束する。
4年 理科	生命・地球・季節と生物 「季節と生物」	生物を大切に作る態度を育て、動物や植物の成長と環境との関わりについての見方や考え方を持つことが出来るようにする。特に花、蝶、そして森の恵の山菜、きのこ などにも興味を持たせる。
道徳 特別活動	郷土愛・自然に親しみ	学校では自然体験や体験活動の事前調査、体験活動後のツール発表などの学習活動を積極的に取り入れてもらう。

(6) 活動の分析 (資質・能力の視点)

3 多面的	源泉川や森の中に入り森林環境を守るために自分たちが出来ることを考える。
5 協力	木を植える作業においてそれぞれが協力的になった。一つの穴を掘ることなどでも場所によっては石ころがごろごろ出てくる、木の根っこも出てくる。 おのずと皆で助け合っの作業になってくる。作業を通じて一本の木でも大事に植え、育てて欲しいという気持ちが出てくる。雪と雪ずれによる幹折れ対策に柴置きにも誰が植えたの関係なく必死で助け合っている。 子供たちの感想文ではツルハシを使っての穴掘り作業が最も助け合っの作業だったと書いている。
7 進んで 参加	一般市民を対象にしたブナの植林体験にも 「水と森の分校」に出ていた子供が親子連れで参加しているのを見かける。

(7) 実施後、参加者の変化

・1回目の水の学習の時には11度の源泉に入り冷たくて泣き出す子供もいたが、その子供たちが回を増すごとにたくましくなっていくし、その交わす会話も様になってくる。もともとたくましい子供たちはどんどん頼もしくなってくるのが分かる。そして自分たちは自然豊かなすばらしい所に住んでいるんだと郷土愛が生まれてきている。
・美味しい水、美味しい空気を作り出す森は大切なんだ。豊かなブナの森があるからなんだ。それに自分たちも関われるのを喜んでいる。必ず植えた木をいつまでも見守ることで話を終える。

大山横手道上ブナを育成する会 「水と森の分校」

目標

自然との関わりなどを学習して、すばらしい所に生まれ
たと誇りを持たせて、森を含めた自然は自分の宝な
んだと気づかせたい。



大山ふれあいの森

植えよう、育てよう、ブナの森！



ブナの森はきれいな空気を作り、豊かな水を抱き、
私達の命を守ってくれています。私達は今、その森
の恩恵を受け、未来に渡していく途中にいます。
元気な森を育てて伝えていくために、**ブナの木**を
中心とした森づくり活動を推進しています。

大山横手道上ブナを育成する会
林野庁 鳥取森林管理署

森と水の分校 体験水

11度の湧き水

山の下から湧いてくる



400m間で湧いて、
19.4万トン／日

ふもとの米子の水は 日本一
19.4万トンの水で どんな量なの？

日本人 人／日 300Lの生活用水
60万人分に相当する。米子市、境港
市、の2.5日分

3

◎水と森の分校

伯耆町立八郷小学校4年生 10～18人(別引率2名)
校外学習に協力 4回／年 (3～3.5時間／回)

- (1) 水の学習
- (2) 森の学習
- (3) 木を植える学習
- (4) 冬の森の学習

その他

森と水に親しむ学校 (共催: 米子地区少年健全育成指導員協会)

8月 小学生40名 保護者及び米子警察署、先生、指導員の総勢70名

水と森の分校のカリキュラム(1)～(3)を 6 時間で行う

ドイツ少年との交流 (環境学習会担当)

毎年 8月に行っている

手入れの出来てない森 放置された森



草 1本ない

ブナの森へ

ブナ林の説明

腐葉土 1センチが100年

森の中の明るさ、その周りの植物、生きものの想像、腐葉土中の生物など

聴診器を当てて、
水の流れる音を聴きました



自然との対話能力
にスイッチを入れる
(5感能力の開発)



最後に給食を食べながら感想を語る



子供たち ミゾレの中で頑張っています



効果

- : 1学期終わりごろから子供たちに変化
「5感」と言う言葉を何の抵抗もなくすんなりと使い出す。
(1日コースの子供たちにはこんなところまで行かない)
- : 3回目のブナを植える体験林業の頃になると
見ても、話しても たくましくて頼もしくなって行くのが分かる。
- : 4年生を終えるときには感受性豊かな打てば響くような子供に成長している。
- : 森を含めた自然は自分の宝なんだと気づいて進級している。
- : 同じ学校で何年も続けていると、子供たちも、先生達も当に
「継続は力なり」と言う言葉どおり自力が付いてきている。
- : 「ふるさと八郷」、子供たちが作詞し、先生が作曲
評判がよくて学校内外でも歌われている。
- : 学校表彰 全日本学校関係緑化コンクール準特選
鳥取県美しいもりづくり功労者

特別: ブナを育成する会員のモチベーションアップにも
効果があった。

今後

学校と連携を密にしながら継続をしていく

森の学習に 今も残る胴回り3~6mもあるケヤキが乱立している里
山の見学を組み込みたい

学年を変えて

将来の水を守る方法を一緒に考えていきたい

世界の水事情の教育 …… 机上教育

節水教育……………体験

日本人の生活用水の平均使用量は300L/日

ドイツ人の生活用水の平均使用量は100L/日

人間らしい生活をするために最低限必要な量は50L/日

1日100L/日の生活体験

水ジャーナリスト橋本淳司先生の指導で考えたい